

モーリス・ユトリロ

20 世紀初期から半ばにかけて活躍したフランス・パリ生まれの画家。風景画を中心に描いた。母のシュザンヌ・ヴァラドンは、ルノアールやドガなどのモデルをつとめ、のちに画家として活動した。10 代の頃よりアルコール依存症になったユトリロに、母が飲酒をやめさせるために絵筆をとらせたのがきっかけで、ほとんど独学で絵を描いた。初期の作品は、ピサロなどの印象派の影響が強く、暗い色調の粗い厚塗りで、パリ・モンマルトルなどの風景が描かれている。やがて 1910 年頃から「白の時代」といわれるユトリロ作品の最も充実した時期が到来し、アルコール依存は変わらなかったが、傑作のほとんどはこの時期に集中して描かれている。透視図法による確かな画面構成が見られ、薄汚いむき出しの壁や人気のない場末の通りなど、都会生活の孤独と空虚を詩情豊かにとらえている。